第 38回　岡倉天心記念　がん哲学外来　巣鴨カフェ「桜」

令和４年 8月6日

言葉の処方箋　　いい覚悟で生きる　樋野　興夫　P83

がん細胞は、わが家の不良息子と同じ

がん治療は、がん細胞との共存環境をつくることが必要です。医療と同時に、人間関係や自身の考え方の改善から始めましょう。

がん細胞で起こることは、人間社会でも同様に見られる ―科学としてのがん学を哲学に発展させた最初の病理学者、吉田富三の思想が、私に及ぼした影響は計り知れません。

「がん細胞は、増殖して仲間が増えると、周囲の正常細胞からのコントロール を脱し、悪性細胞としての行動をとるようになる」という吉田富三の言葉を受けて、私はがん哲学外来でがん治療のとらえ方について話をするとき、こんなふうにたとえます。

「がん細胞は、わが家の不良息子と同じですよ」

小さいころは明るく素直だったわが子が、悪さをする友だちと連れ立って手の負えない不良になってしまいました。ですが、親のコントロールがきかない子になってしまっても、不良息子を抱える親は、不良息子を追い出すことで家庭を良くしようとは決して考えません。不良息子をかつてのわが子に、つまり、悪さをしない子に戻すことを考えるでしょう。

そのためには、不良息子を囲む周りの環境を改善して、わが子の良い資質、本来の使命を思い出させることです。人間形成のために必要なのは、物理的な環境要因よりも人間関係における環境要因だからです。

がん治療も同様です。がん細胞を殺すのではなく、最終的には正常な状態に戻していくことが必要です。それまでは不良息子の更生を忍耐強く見守るように、がん細胞の状況に一喜一憂しないで「共存」していくことを肝に命じます。がん細胞のリハビリテーションができる環境をどのようにつくっていくかが課題となるでしょう。

私は、医療としてのがん治療と同時に、人間関係や自分自身の考え方の改善が共存の環境をつくる上で大きな役割をなすものと考えています。それは、自分がいちばん大事で自分のことしか考えない状態から、自分よりもさらに大切なものがある、という他者に目を向ける考えに修正をしていくことです。

では、自分よりも大切なものとはなんだと思いますか。それは、愛しかありませんいのちよりも大切なものも、また愛だと私は考えています。「利他の心」とも言われますが、がんとの共存環境は、いちばん大切なものを自分から 他者へ、さらには普遍の愛へとシフトすることで得られるのだと思います。

さて、自分のことしか見ていなかった「不良息子」は、他者への愛という環境の中で、本来の使命を忘れない生き方を続けていってくれると信じたいものです。